

# 平安末期における善珠撰述仏典注釈書の継承

河野 貴美子

## 一 はじめに

日本の唯識・因明学の祖とされる興福寺僧善珠が残した仏典注釈書は、反切による音釈や外典を含むさまざまな典籍からの引用を駆使した訓釈をその大きな特徴とする。善珠の学問は、日本の唯識・因明学の展開の中でいかに受け継がれていったのか。小稿ではおもに、平安末期の興福寺僧藏俊の著述を通して検討を試みる。

具体的には、善珠撰『因明論疏明灯抄』および藏俊撰『因明大疏抄』を取りあげる。これらはともに、唐・慈恩大師基の『因明入正理論疏』に対する注釈書であるが、『因明論疏明灯抄』は、奈良末期という早い時期に成立した、日本における因明注釈書の先駆的な存在で、一方、藏俊の『因明大疏抄』は、『因明論疏明灯抄』を含め、それ以前の唐・新羅・日本の因明関係書の記述を藏俊が集大成した、平安末期における因明学の一大成果といえるものである。

これらは、いずれも法相宗興福寺の僧侶による因明学の注釈書と

いう、限定された場に生まれた著作ではある。しかし、例えばその周辺には『類聚名義抄』など、国語史上重要な資料も存在する。そこで小稿では、善珠が施した反切注記の藏俊『因明大疏抄』への継承状況に特に注目し検討することによって、各おのの時代の学問僧が、漢字・漢文というものにいかに向き合い、それをいかに読み解いていったのか、その営みの一端を明らかにしたい。また、彼らが漢文を読み解く際に参照した資料、利用した辞書類や漢籍はどのようなものであったのか、という点にも言及していきたい。

さて、善珠の仏典注釈書は、善珠当時の中国の義疏・注疏の形式にそのまま倣うもので、いわゆる漢唐訓詁学的な知識に基づく注解がしばしばみえる。ところが、善珠がさまざまな漢籍や中国の辞書類を駆使して施したそれらの注釈は、後世、江戸期に版本が作成される段階になると、その一部が改変されてしまう。そしてその場合、<sup>(1)</sup>改変が顕著にみられるのは、反切による音釈部分であった。前稿では、これについて、善珠の時代のものとは異なる、新しい辞書類やその他の漢籍を利用していた後世の読者が、読者にとつての現在の

テキストとしてより正しい形にするために、善珠の注釈文に手を入れた結果であろう、と考察した。そこで、こうした現象は、平安末期に蔵俊によって唯識・因明学が集大成された時点においてもみられるのかを明らかにしたい、というのが小稿のねらいの一つである。

また、かつて、善珠撰述の『成唯識論述記序釈』について検討した際、蔵俊の弟子である覚憲の書写本を祖本とする現存最古の『成唯識論述記序釈』写本を調査した。<sup>(3)</sup>現在東大寺図書館に所蔵される当該写本（貴重本一四函二二号・寛永八年（一六三一）東大寺清涼院実英写）の覚憲の本奥書には、

当寺聖教、災火以後、所残僅九牛之一／毛也。仍殊以末法留住之等、令書写訖。／嚴僧、手自一遍比校了。元暦元年十二／月

上旬之比、記之。／釈覚憲。

とあり、その祖本は平重衡による南都焼き打ち、いわゆる治承の大火をくぐり抜けて僅かに残った「九牛の一毛」であつたと記されている。つまり、善珠の『成唯識論述記序釈』という書物は、このとき覚憲によって伝写されなければ、今に伝わるものがなかったかもしれないのである。そこで、南都焼き打ちという困難な局面にあつて、その前後に、興福寺の因明・唯識学のリーダーとしての重責を担った蔵俊、そして覚憲にとつて、善珠の注釈書がいかなる意味をもつて継承されたのか、さらに具体的に突きとめたい、と考えたのが、小稿の今一つの問題意識である。

善珠や蔵俊の著作については、これまでも仏教史学や国語学など

の立場からの研究は数多く、中でもいわゆる訓点資料としての調査は詳細に進められている。<sup>(4)</sup>また、日本古代のその他の仏典注釈書類にみられる反切について、特に原本系『玉篇』との関係は近年も注目されている。<sup>(5)</sup>しかし、例えば、善珠が加えた反切・訓詁の一つ一つについては、依然として解明されるべき問題点が多く残されている。反切注記に注目し、奈良末期から平安末期への仏典注釈書の継承を検討しようという小稿の試みを、当時の仏家らの漢文知識や漢籍受容の実態を読み解くための新たな一観点として提出したい。

## 二 善珠と『因明論疏明灯抄』

まず、善珠および『因明論疏明灯抄』について概観する。

善珠（養老七（七二三）―延暦十六（七九七））は、入唐僧玄昉の師として唯識・因明学を究めた、奈良末・平安初期を代表する学問僧で、『因明論疏明灯抄』十二卷や『成唯識論述記序釈』一卷のほか『唯識義灯増明記』四卷、『法苑義鏡』六卷など、当時としては極めて多くの著述を残している。善珠の著作は主として、中国からもたらされた仏典に対する注釈書であるが、同時代の他の僧侶らの著作の多くが散佚してしまっている中で、善珠の著作が複数伝存していることは、善珠の注釈が後世いかによく読まれ、受け継がれていたかを端的に示すものといえる。

『因明論疏明灯抄』（天応元年（七八一）成立）は、善珠の代表的

な著作で、『日本国語大辞典』にも「注釈書とはいえ、日本の著述界における最初の大論述<sup>(6)</sup>」と紹介されている。「因明」とは、物事の正邪・真偽を考察論証することを目的とする古代インドの論理学<sup>(7)</sup>で、日本では専ら、唐・慈恩大師基の『因明入正理論疏』（七世紀成立）によって学ばれた。『因明入正理論疏』は、玄奘三蔵が翻訳した『因明入正理論』（天主・シヤンカラスヴァーミン）に対する注釈で、善珠の『因明論疏明灯抄』は、この慈恩大師の『因明入正理論疏』に對してさらに注解を加えたものである。

さて、『因明論疏明灯抄』の注釈に対する小稿の関心は、はじめにも述べたように、中国の辞書類や外典をも駆使した、いわゆるその漢唐訓詁学的な注釈方法、とりわけ反切を用いた注釈にある。『因明論疏明灯抄』には、計一四九字の被注音字に對して、直音による音釈が二例、反切による音釈は一六一例みえる<sup>(8)</sup>。その中には、切韻系韻書と一致する反切が十六例、玄応『一切経音義』と一致する反切・直音が四十二例<sup>(9)</sup>含まれ、善珠がそれら中国の辞書、音義書類を参照しながら反切注記を転引したことをうかがわせるが、もつとも注目すべきは、いわゆる原本系『玉篇』との反切の一致である。

梁・顧野王の原本『玉篇』は夙に失われ、その残巻のみが日本に伝存することは周知の事である。しかし日本には、その原本系『玉篇』のほかに、『玉篇』を抄出して空海が編纂したとされる『篆隸万象名義』が伝わる。そして、『因明論疏明灯抄』には、原本系『玉篇』および『篆隸万象名義』との間に合計六十六例もの反切の一

致が見出せるのである。その中には、切韻系韻書や玄応『一切経音義』など他の辞書、音義書類にみえる反切とは異なり、唯一原本系『玉篇』（もしくは『篆隸万象名義』）とのみに一致する反切が二十九例ある。また、反切に続く訓詁部分も全て含めて一致をみるものも十二例あまりにおよぶ。紙幅の都合もあり、いま、一つ一つを詳細に検討することはできないが、例えば、

「的」、『都激』反。射、「的」也。礼記、「君子之道、闇然而日影。小人之道、的然而日見」。鄭玄曰、「小人浅近易知也」。野玉案、「的」、明然見也。」

（『因明論疏明灯抄』卷四末（大正新脩大藏經第六十八卷三五七頁c）。〔一〕は双行注、以下同。）

のように「野玉案」、すなわち『玉篇』編者の顧野王の案語を伴う場合などは、他でもなく原本系『玉篇』からの転引と考えられる<sup>(10)</sup>。

原本系『玉篇』が日本の古典文学の形成に与えた影響の大きさについては、夙に小島憲之氏をはじめとする先学による指摘があるが、その原本系『玉篇』をこのように豊富に引用する善珠の注釈書は、佚書『玉篇』の復原に資する佚文資料としても有用な価値を持つもののなのである。

### 三 蔵俊と『因明大疏抄』

次に、蔵俊と『因明大疏抄』について、基本的な事項を確認する。

藏俊（長治元（一一〇四）〜治承四（一一八〇））は、覚晴らに師事し法相を学び、元興寺別当、興福寺別当などを務め、没後には僧正を追贈された。藏俊には、『因明大疏抄』四十一帖、『唯識比量鈔』二卷、『法華玄贊文集』など多数の著作があるが、因明・唯識学を集成したその藏俊の功績の背景に、藤原頼長の深い関与があったことはよく知られる。<sup>(11)</sup>

藏俊の代表的著作『因明大疏抄』（仁平二年（一一五二）成立）は、善珠の『因明論疏明灯抄』同様、慈恩大師の『因明入正理論疏』に対する注釈書である。ところが、その注釈の方法は、善珠のものとかなり趣を異にする。すなわち、『因明論疏明灯抄』が、『因明入正理論疏』の本文を科段に分け、時には逐語的に詳細な反切、訓詁注釈をつけていくものであったのに対して、藏俊の『因明大疏抄』

因三相以下。

因有二種。

一、生因。……二、了因。

生因有三。

一、言生因。……二、智生因。……義生因。義有二種。一、道理

名義、二、境界名義至本籍言生云云。

①略纂云。所作因義、雖能為境、生敵証智、隔立者言、亦無持業云云。

②明灯抄云。「道理義」者。能詮言者、筌也。所詮義者、旨也。

は、『因明入正理論疏』の中の論題を取りあげ、その論題に関する諸説を、先行するさまざまな書物から集め引用列記していく形を基本とする。

さて、藏俊は、『因明大疏抄』巻末に因明関係の参照資料目録を自ら付している。そこには二十四部の典籍名が並び、中には現在では佚書となっているものも多い。<sup>(12)</sup> 藏俊がこれほど多くの典籍を利用できたことについては、これが治承四年十二月の南都焼き討ち前の成立であることに言及しておかねばならないだろう。藏俊は焼き討ち直前の同年九月に没している。興福寺、東大寺が焼き討ちに遭う以前、藏俊は中国、新羅、そして日本の数多くの書物を利用しうる環境にあったと思われるのである。

ではここで、『因明大疏抄』の注釈の方法を具体的にみよう。

文。「義生因者」至「名能立等」者。

②「道理義」者。能詮言者、筌也。所詮義者、旨也。筌・旨、

相称必然之理故、言「道理」。

「三義生因」者。即立論言所詮因義。与言生因為所詮故。生之

義名義生。生即因名「義生因」。此約「道理」、説「義生因」。

①所作因義、雖能為境、生敵証智、隔立者言、亦無持業。④生雖有三、言生是正。以對敵等決定解故。智・義、亦「生因」

者、言依詮故。

筌・旨、相称必然之理故、言「道理」。

③此義意云。取敵論者了宗智為果。即知、敵論所作智因能了宗果者、是從立者言之所生故。「生因」中言為正因、智・義依詮、通名「生因」云云。

尋云。爾者於此三因。如何分別兼正耶。

疏云。「言為正生」至「時名能立等」云云。

④略纂云。生雖有三、言生是正。以對敵等決定解故。智・義、亦名「生因」者、言依詮故云云。

尋云。若爾何論云因有三相耶。⑤相者、義也。豈非義因是正因耶。

⑥寶疏一云。問。若云言生是正因者、何以入理論云因有三相、及理門云宗法於同品謂有非有俱等。答。欲明言說詮三相義、方是正因故拳也云云。明燈抄引之。

以上三因局約立論釈之也云云。

〔因明大疏抄〕第九帖（大正新脩大藏經第六十八卷四七七頁b～四七八頁b）。なお、論述の便宜上丸数字等を施し、一部句読を改めた。下段の『因明論疏明燈抄』も同じ。）

上段の『因明大疏抄』は、ほぼ、下段の『因明論疏明燈抄』の注釈に拠っており、『因明論疏明燈抄』の注釈文を並べ替え、再構成したものであることが分かる。

そして、注目すべきは、善珠の『因明論疏明燈抄』が出典を掲げ

平安末期における善珠撰述仏典注釈書の継承

③此義意云。取敵論者了宗智為果。即知、敵論所作智因能了宗果者、是從立者言之所生故。「生因」中言為正因、智・義依詮、通名「生因」。

⑥問。若云言生是正因者、何故論云因有三相。⑤相者、義也。豈非義因是正因耶。

⑥答。欲明言說詮三相義、方是正因故拳之也。此上三種之「生因」者、局挹立論明之也。

〔因明論疏明燈抄〕卷二本（大正新脩大藏經第六十八卷二五五頁c）

ないまま注釈文に取り込んでいた文章が、この『因明大疏抄』の記述によって、①と④の部分は「略纂」、⑥の部分は「寶疏」からの引用であったことが明らかになることである。「略纂」とは恵沼の『因明入正理論略纂』、そして「寶疏」とは定賓の『因明理門論疏』で、

『因明大疏抄』巻末の目録には記載されるものの、いずれも今はなき佚書である。

藏俊の記述は、このように、善珠『因明論疏明灯抄』の注釈文中に、実は中国の注釈書からの引文が組み入れられていたことを解き明かしてくれるわけである。そしてさらに藏俊は、⑥の引用の末尾に「明灯抄二に之を引く」とも注記している。こうした記述からは、藏俊が、今では見ることのできない佚書を含む多数の典籍に囲まれ、そして、その一つ一つの記述を検証し、誰がどのような説を唱え、その説が誰によつて継承されてきたのか、ということまで詳細に把握し整理していた、ということを推しはかることができる。

#### 四 『因明論疏明灯抄』から『因明大疏抄』へ

##### — 反切注記の継承 —

それでは、藏俊は、善珠『因明論疏明灯抄』にしばしばみられる、反切による音釈や、訓詁学的な注釈に対してはどのような態度を取っているのだろうか。

実は、『因明大疏抄』四十一帖の中には、計二十六例と数はさほど多くないものの、反切による漢字の音釈がみえる。そして、興味深いことに、『因明大疏抄』の注釈文中にみられる反切注記は、後でみる一箇所を除き、全て善珠『因明論疏明灯抄』からの引用、もしくは『因明論疏明灯抄』に同一の反切注記がみられる、というもののな

のである。

ちなみに、藏俊による撰述の可能性が指摘されている唯識学の一部な注釈書『成唯識論本文抄』四十五巻において、唯一みられる反切注記が、やはり善珠の著作からの転引であることが既に指摘されている。<sup>13)</sup>

さて、藏俊が反切による漢字の音釈を注釈書に加える際、それがほとんど善珠の用いた反切を援引するものであることは、注目すべき偏りであるといえる。そして、そういう傾向を確認したうえで、『因明大疏抄』における『因明論疏明灯抄』の反切注記の継承、ということに焦点をあてるならば、そこからさまざまな事がらが見えてくるのではないだろうか。例えば、藏俊にとって、時、約三百年を隔てた善珠の反切注記はいかなる意味、意義をもっていたのか。またそもそも、漢文を訓読するのではなく、反切を用いて漢字の音釈を付すことは、平安末期という時期を生きた藏俊にとっていかなる意味があつたのか。これはすなわち、漢文をどう読むか、という、古代日本の知識人が向き合わざるを得なかった問題を解く鍵にもつながっていくことであろう。また、『因明大疏抄』への引用を通して、善珠が施した反切注記の持つ価値を改めて浮き彫りにすることも可能ではないか、と期待できる。

以下、いくつか具体的な箇所を取りあげ、考察を進める。

(1) 四声を含む反切注記

明燈抄云。「二燈・二炬・二影・二光」等者。

大毘婆沙論第九十六卷云。○復次欲現二門・二略・二階・二燈・二炬・二明・二光・二影故作是説〔已上論文〕。

燈・二炬・二明・二光・二影故作是説〔已上論文〕。

燈・二炬・二明・二光・二影故作是説〔已上論文〕。

案云、「婆沙意」者、二門・二略、以為一雙。二階・二燈、以

為一雙。二炬・二明、以為一雙。二光・二影、以為一雙。合

為四雙。今疏中云、「二影・二光以為一雙」。其義可爾。順論文

故。「二燈・二炬為一雙」者、未詳其旨。燈・二炬・二光・二影、詮義已足。更標「二燈」。

是何所詮。

〔因明大疏抄〕第七帖（大正新脩大藏經第六十八卷四六八頁b）

右は、「因明大疏抄」が『因明論疏明燈抄』をその反切注記とともに引用する一例である。当該箇所は、『因明論疏明燈抄』が、慈恩大師の『因明入正理論疏』本文の「二燈・二炬……」という語について、『大毘婆沙論』に「二階・二燈……」とあることと合わせて検討する部分で、善珠は、「燈」は去声であるのに対し、「炬」は平声であり、音が異なることを理由に疑義を示している（網がけ部分）。反切を用いて漢字の読み方を示し、さらに四声をも確認している善珠のこの注釈は、漢字の読み、漢字の意味、すなわちその漢字の意味をどのように捉えるべきかという問題につながることを指摘しているのである。

日本における四声に関する議論の古い例としては、安然の『悉曇藏』の記述がしばしば取りあげられる。<sup>(15)</sup>しかし、善珠がこれよりも早く、また例えば空海の『文鏡秘府論』よりも早い時期に、このように漢字音の知識に基づく注釈を残していることは、注目に値しよう。なお、『因明論疏明燈抄』には、これ以外にも四声に言及し、そ

れに基づき注釈を施す善珠の言説が数箇所みえる。<sup>(16)</sup>

それでは、こうした注釈方法を善珠はいつどこから学んだかという点、それはやはり、本場中国の注釈書の方法を学び取ったのであろう。例えば、慈恩大師基の法華經注釈書『妙法蓮華經玄贊』<sup>(17)</sup>には、やはり經典の中の漢字について、四声を并じつつ注釈を加える例がみえる。

經「毒虫之属」至「各自藏護」。

：「生」、雖平・去二音。応従平音。：

〔妙法蓮華經玄贊〕卷六本（大正新脩大藏經第三十四卷七五九頁a-b）

四声への言及は、『因明論疏明燈抄』の直後、九世紀初めに成立した安澄の『中論疏記』にもみえるが、善珠の注釈は、日本人によって、漢字の四声と意味の問題、すなわち、漢字の「音」と「義」に関する考察が行われ、それが書きとどめられた先駆的な例ではないかと思われるのである。

そして、ここで強調したいのは、そうした善珠の仕事が、たしかに善珠によって行われたものであることが、藏俊の『因明大疏抄』

への引用によって明らかになることである。つまり、前述したように、蔵俊は、先行の書物から文章を引用する際、ことのほか綿密にその出典を明記している。そして右に見た、四声に関する議論の部分も、蔵俊は「明灯抄云」と出典を明記して引用している。これは、この四声・反切を用いた注釈が、中国の書物からの引き写しではなく、紛れもなく善珠によって施された注釈として蔵俊に受け継がれていた、ということを示しているのである。

またさらには、蔵俊が『因明論疏明灯抄』から反切や四声を含むこうした善珠の注釈を『因明大疏抄』に取り入れたのは、蔵俊にとつて、それが取りあげるべき意味を持つと判断されたゆえのことと考えることができる。『因明大疏抄』が注釈文の中に引用する『因明論疏明灯抄』の反切注記は、『因明論疏明灯抄』における全一六一例中二十六例と、決して多くはない。ところが蔵俊は、これ以外に、各帖の表紙裏などに、さらに十二例の反切注記を『因明論疏明灯抄』から取り出し書き入れている。蔵俊のこうした記載方法は、反切による漢字音注記が、蔵俊にとつても必要かつ重要な情報であったことを示しているのではないだろうか。

## (2) 『因明大疏抄』各帖の表紙裏に書き入れられた反切注記

そこで次に、『因明大疏抄』各帖表紙裏に書き入れられた反切注記について検討していくことにするが、その前にまず、『因明大疏抄』の伝本について確認しておく。

『因明大疏抄』は、大正新脩大藏經第六十八巻に収められており、その底本は東大寺図書館所蔵の写本（和書三〇函一六六号。寛文・延宝年間書写）である。ところがこの本は、もと表紙裏にあったはずの書き入れを各帖末に移し「第…帖ノ口ノ表紙ノウラニ」などとして記し、また注釈文の所所を省略するなど、テクストにやや改変の手が加えられた跡がみえるものである。大正蔵が対校本とするのは薬師寺所蔵の古写本であるが（未見）、このたび、伝本の調査を行う中で、大谷大学図書館所蔵の写本（余大三九二）が薬師寺本と同系統であり、そしてむしろ薬師寺本よりも大谷大学本の方が、奥書などを整った状態で伝えるものではないか、ということが明らかとなつてきた。<sup>(19)</sup>

大谷大学本の各帖表紙裏の記載および各帖末の奥書によると、『因明大疏抄』は蔵俊によって久安七年正月一日（第一帖表紙裏）から仁平二年四月六日（第四十一帖奥書）にかけて執筆され、当該写本は、貞永・天福年間の権僧正実信による書写、さらに永祿年間の興福寺僧英俊による書写を経て伝えられたものであることが分かる。<sup>(20)</sup>そして、現在伝存する他の伝本も、大正蔵が底本とする東大寺図書館本を除き、ほぼいずれもこの英俊書写本をもとにするものである。

そこでいま、大谷大学本によって表紙裏の記載をみると、例えば、『因明大疏抄』第三十三帖の表紙裏（図1）には「梗概」という字句に対する反切注記が「明灯抄」を出典として書き入れられている。当該部分は、もとの『因明論疏明灯抄』では、



「若有後三不成可有不定及与相違」等者。

①問。不成闕初相、不定相違、後二相過、既各不同。如何不成得有不定及相違耶。

答。兩俱之中無隨一義故無不定及与相違。後三不成各有隨一故有不定及与相違。既言隨一。一分闕初相、一分不闕初相。若約闕義、即有不成。約不闕義、同有異有、即有不定。約不闕義、同無異有、即有相違。

文「自他共比」至「余如理思」者。

②梗概者。大旨也。梗、〈柯杏〉反。直也。略也。概、〈柯亥〉反。

③「二十七不成」者。兩俱四句、隨一八句、猶豫六句、所依九句、合二十七不成也。：

〔因明論疏明燈抄〕卷五末（大正新脩大藏經第六十八卷三九五頁c）

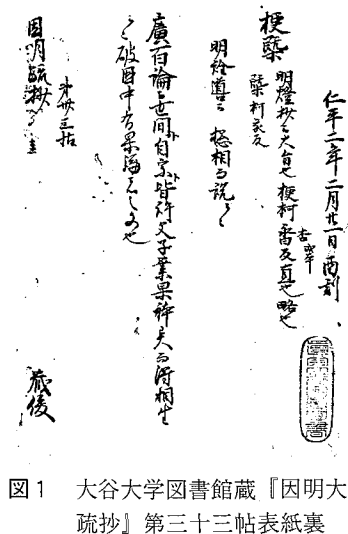


図1 大谷大学図書館蔵『因明大疏抄』第三十三帖表紙裏

とある。このうち①、③の論議の部分は『因明大疏抄』第三十三帖の本文中に引用されているが、間に挟まれた②の反切注記は『因明大疏抄』の本文中には引用されず、その部分だけが、当該帖の表紙裏に特に取り出される形で書き入れられているのである。

こうした複雑かつ周到な引用の方法は、この表紙裏の書き入れがほかでもなく撰者蔵俊自身によるものであることを示している。そして、蔵俊がこのように反切およびそれに伴う訓詁注記を特に取り出して表紙裏に記しているということは、その情報が蔵俊にとつてとりわけ必要なものと考えられていたことを示すのではなかろうか。<sup>(22)</sup>

ところで、『因明大疏抄』の表紙裏には、わずかながら『因明論疏明燈抄』以外の書物を出典とする反切注が取られている。そのうち『日本感靈録』からの引用については、近年後藤昭雄氏によって、『日本感靈録』の伝来に蔵俊の関与があったのではないか、という指摘がなされている。<sup>(23)</sup>

また『因明大疏抄』には、「類音決」なる書物からの引用がみえる。

類音決云。拏〔正。へ奴加〕反。一。拏〔正。へ他朗〕反。又へ奴〕音。又へ妬〕反。一。拏〔正。へ奴〕音。一。

（大谷大学図書館蔵写本『因明大疏抄』第二十七帖表紙裏）  
類音決七云。莖〔俗〕莖〔今皆へ臣〕音。一藤、黒胡麻也。案説文、束葦焼也。」

（同『因明大疏抄』第二十八帖表紙裏）

吉田金彦氏は、この「類音決」を、『智証大師請来目録』に「新定

一切経類音 八卷 郭逢」と著録されるものとし、圖書寮本『類聚名義抄』にはその「類音決」から約一五二条もの引用がみられるとする。<sup>(24)</sup> また吉田氏は、「正」「俗」など漢字の字体を細かく弁別することを「類音決」の特徴として指摘している。字体に関する問題は、後の例で再び触れるが、ここで注意したいのは、「類音決」という善珠以後に将来された新しい音義書を用いて、藏俊自身が反切などの音釈を付け加えていることである。

この「類音決（音決）」という書名は、興福寺に伝存する写本『因明義断』の裏書にも見える。

傑——音決曰、「二俗」傑「正」。皆へ榮音。英也「三」。

（興福寺蔵写本『因明義断』（第七函十。正治二年（一一〇〇）写）

そして、奥書の記述によると、この『因明義断』写本は、他でもなく藏俊そして覚憲の手を経て伝えられた本に基づき伝写されたものなのである。<sup>(25)</sup>

難解な因明学を説く漢文の書物を、平安末期の日本人がどのように読んだか、ということについては、九世紀半ばの元興寺僧・明詮の訓読法が主に尊重され伝えられたとされている。<sup>(26)</sup> 例えば、興福寺所蔵写本『因明入正理論義纂要』奥書（第七函十一）にも、

点本奥記云。元興明詮天長八年略勘了。九年三月廿六日講。興福寺僧定寂以／安和三年（歳次庚午）二月（己午）晦日、尋借

明詮僧都点本書云。

と、明詮の点が伝えられたことがみえる。<sup>(27)</sup>

しかし一方、興福寺蔵写本『因明義断』裏書には、「類音決」以外にも『爾雅』『広雅』『玉篇』『切韻』などさまざまな古辞書、韻書からの反切・訓詁の引用がみえる。<sup>(28)</sup> これは、平安末期にあつて、たとえ漢文が基本的には訓読によつて読まれるようになっていっても、やはり、それ以前からの伝統的な、中国の辞書類に基づく反切・訓詁というものが併存している状況を具体的に示している。そしてこれは、善珠の反切を切り捨てるところか、特に取り出して『因明大疏抄』に加えた藏俊の態度とも重なるものである。またこのことは、和訓と反切・訓詁を合わせ持つ圖書寮本『類聚名義抄』が同時期に成立していることと考え合わせても、興味深い現象と思われる。

以上、藏俊は、善珠『因明論疏明灯抄』所載の反切を中心として継承しつつ、自らも新しい資料に基づいて漢字の読み・意味をめぐる記述を付加させている場合もあることを、表紙裏の書き入れ状況からみた。そして実は、『因明大疏抄』の本文中にも、おそらく藏俊自身が反切注記を付け加えたと思われる箇所が、わずか一箇所ではあるが存在する。そしてその部分は、『因明大疏抄』において、一つの漢字の読みをめぐる議論を徹底的に突きつめようとする、藏俊の問題意識が明らかとなる箇所なのである。

(3)「雋」あるいは「雋」の読みをめぐって  
唐興雋法師：

①明灯抄文

雋（「似充」反。説文、肥肉也。又為雋。へ才選」反。亦俊字也。玉篇、為雋字、不為門也。充、へ力全」反。）」

②明詮道文

雋・雋（へ子峻」反。峻、へ私聞」反。

③横川僧都云。

周云。雋法師者。亦作雋字云云。雋者、へ但宛」反。鳥肥也。

有作雋。へ子峻」反。智過千人曰雋。又作雋（「正也」。又作俊

（「俗也」云云。

④唐韻上声云。

雋（鳥肥也。又姓。漢有云不疑。へ但宛」反。充、へ以轉」反。去声。

雋（智過千人曰。へ子峻」反。雋（「正也」。俊（「俗也」。

雋字。

⑤長譽已講。用詮字。

⑥永超僧都云。靈雋亦作俊。不可用へ詮」音。

（『因明大疏抄』第三十一帖。大谷大学本（図2）により翻刻し、便宜上①～⑥の記号を付した。）

これは、『因明入正理論疏』にみえる「唐興雋法師」なる人物の「雋」（雋）の文字と読みをめぐる注釈部分である。「雋」か「雋」か、

平安末期における善珠撰述仏典注釈書の継承

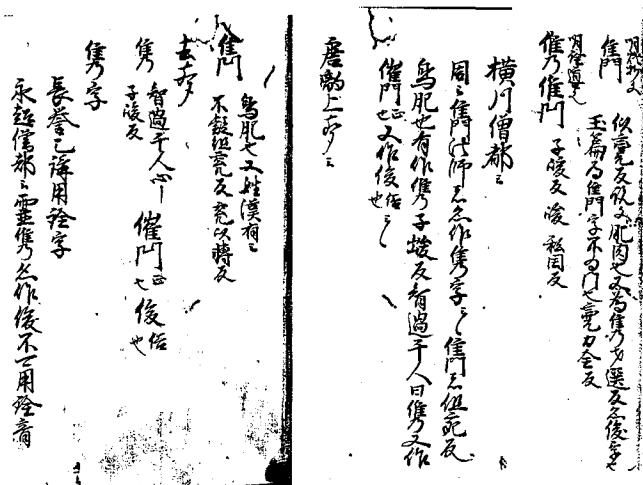


図2 大谷大学図書館蔵『因明大疏抄』第三十一帖

藏俊は善珠、明詮、源信ら先師の説を並べ、さらにはおそらく自ら『唐韻』の引用を加え、検討を重ねている。以下、順にみていく。

①の「明灯抄」からの引文は、まず掲出字に問題がある。「雋」は『説文解字』では、

雋——肥肉也。从弓。所以射雋。長沙有下雋県。

とあり、鳥を弓で射る様子、つまり下の部分を門に作るのはあり得

（『説文解字』四上・佳部）<sup>(29)</sup>

図3 興福寺蔵『因明論  
疏明燈抄』卷第五  
末

〔經〕夏五月鄭伯克段于鄆

図4 興福寺蔵『因明入正理論疏』卷下始

圖5 高麗本『龍龕手鏡』卷一  
(景金剛山楡岾寺藏本、京城帝國大學法文學部複製)

なお、興福寺に伝わる建武二年（一三三五）写本『因明入正理論疏』（第十七函一（七））図4では、当該字は「𠂔」に作っている。

また、③の源信の注釈文で注目されるのは、字体について正・俗を弁別して載せることである。字体の正・俗の規範を整えたのは、唐・顔元孫の『千祿字書』からといわれるが、大谷大学本のように、

「偽」について、山の字を上に乗せる字形を「正」とするのは、遼・行均の『龍龜手鏡』にみられる(図5)。「龍龜手鏡」は十一世紀初めに日本に伝わったともされるが、正確な伝来は不明である。しかし、その頃には相前後して可洪『新集藏經音義隨函錄』など、やはり字体を細かく弁別する内典の音義書が成立しており、そうした流れが觀智院本『類聚名義抄』に連なることが指摘されている。<sup>(32)</sup>『因明大疏抄』の引文は、こうした辞書の歴史や傾向と重ね合わせて考えることのできる記述なのである。

さて、藏俊は続いて④で『唐韻』を引用する。これがはたして孫緬の『唐韻』を指すかどうかは明確ではないが、ここで注意すべきは、藏俊が、「唐韻上声云…去声…」と、四声の別も明示した上で引用していることである。<sup>(33)</sup>

藏俊自身が漢字の音について十分に意識していた、ということについては、これとは別に注目すべき資料がある。それは、興福寺に承久元年(一一二九)写本が伝わる『因明教授抄』三卷(第七函四)である。『因明教授抄』は、保元二年(一一五七)の藏俊の談義を覚

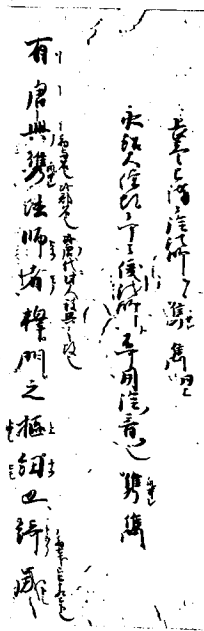


図6 興福寺蔵『因明教授抄』

憲が筆録したもので、慈恩大師の『因明入正理論疏』の重要語句に對して、その読み方を仮名や声点をもって詳細に記し伝授するものである。<sup>(34)</sup> いわばこれは、藏俊の因明音義書であり、因明書の漢文を藏俊当時にはどう読んだのかを具体的に伝えるものである。そしてこの中で、今問題としている箇所は(図6)、

長誓已講云詮法師云云。○雋 雋同上

永超大僧都云可云俊法師不可用詮音也。○雋 雋

有唐興。○雋法師者釈門之樞紐也。  
——者寺名也或郡名也或唐代此人被興之故也

(声点是一部省略した)

とあり、長誓、永超兩師の説を引いた後、最終的に「雋(偽)」という読みで確定されている。

## 五 おわりに

因明関係の漢文テキストを読む際、日本では、平安初期の明詮の訓読が基準となつて伝えられたことは、先にも触れた。しかし例えば、興福寺蔵写本『因明入正理論疏』卷上終奥書(第十七函一(三))には、<sup>(36)</sup>

校本云

依 長者殿仰以明詮点為本重以愚案点三卷／疏此卷始自仁平四年正月十六日至于二月十四日／移点畢 釈氏藏俊

仁平四年七月十五日以藏公為読始／廿七日読了 字点有誤者改直了／左大臣

同月廿八日読序了本点〔序非明詮〕不甘心者／任愚意削改了

自正月十六日至于二月十四日午刻了五月廿八日／直了六月廿四日一遍読含了

久寿三年二―三日重読了〔不對師〕去月廿四日／始之 久寿三  
―三十八日重読了去月廿二日始之：

と、本文の読みをめぐって、蔵俊や頼長が検討を繰り返し、時にはそれまでの読み方を改めたことが記されている。この奥書は、夙に注目されてきたものであるが、蔵俊らの基本的な姿勢は、それまで積み上げられてきた読みの成果を批判的に継承し、不審部分に対しては、自ら検討を加え、新たな情報を取り込み、最新の到達点を示すというものであったわけである。そして、だからこそ、善珠が『因明論疏明灯抄』に示した、伝統的な反切による音注、そして訓詁注釈というものは、厳密な読みを達成しようとした蔵俊にとつて、その出発点となり基本となる必須の情報であつた、と考えられるのである。

以上、善珠の注釈が、蔵俊にいかに関受継がれたのか、反切注記の継承ということを中心に検討した。さらに考察を加えるべき点は多々残っているが、例えば、善珠の注釈書のもつ意義、また奈良から平安期にかけて日本の仏家らが漢文テキストにどのような向き合ったのかということ、さらには古代日本の仏家らによる漢籍受容

の問題などについて、上に述べたことをいくらかの手がかりとして、今後検討を続けていきたい。

# 註

- (1) 拙稿「鷲嶽」の注解をめぐって―善珠撰『成唯識論述記序釈』の注釈文改変に関する一考察―（『国文学研究』一四五、二〇〇五・三）。
- (2) 覚憲は藤原通憲（信西）の五男。南都焼き打ちの後、東大寺大仏開眼供養導師、興福寺別当を務めるなど南都復興に尽力した。
- (3) 拙稿「奈良末・平安初期における唐代文化受容の水準―『成唯識論述記序釈』を通して―」（『国文学研究』一三九、二〇〇三・三）等。
- (4) 善珠撰述仏典注釈書に関する先行研究のうち、主に反切や訓詁学的注釈について論じたものには、白藤禮幸「上代文献に見える字音注について」（二）（『茨城大学人文学部紀要文学科論集』二、三、一九六八・一二、一九六九・一二）、同「上代言語資料としての仏典注釈書」（『国語と国文学』四六―一〇、一九六九・一〇）、同「義注の研究―善珠『因明論疏明灯抄』の場合―」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院、一九九五・一〇）、猿田知之「南都仏教の語学的研究について―善珠を中心として―」（上）（下）（『シオン短期大学研究紀要』三三、三四、一九九三・一二、一九九四・一二）、井野口孝「善珠『因明論疏明灯抄』所引『玉篇』佚文攷」（『国語文字史の研究』八、和泉書院、二〇〇五・三、注1、注3の拙稿、また拙稿「善珠撰述仏典注釈書における漢籍の引用―『成唯識論述記序釈』をめぐる一考察―」（『中古文学』七一、二〇〇三・五、同「善珠撰『成唯識論述記序釈』に現れた外典の特色―『白虹飛渡』の注釈をめぐって―」（『田中隆昭編』『日本古代文学と東アジア』勉誠出版、二〇〇四・三）、同「善珠撰述仏典注釈書における老荘関係書の引用」（『アジア遊学』七三、二〇〇五・三）等がある。また、訓点資料として因明関係書を論じたものに、築島裕「国語史上における明詮大僧都の訓説」（『南都仏教』三五、一九七

五・一一)、月本雅幸「因明論疏の古訓点について」(前掲「築島裕博士古稀記念国語学論集」)、同「因明論疏の古訓点とその伝承」(「訓点語と訓点資料」記念特輯、一九九八・三)等がある。

- (5) 小島憲之「空海の「あや」以前―素材史の一面―」(一九七八初出。『国風暗黒時代の文学 補篇』塙書房、二〇〇二・二所収)、井野口孝「智光『浄名玄論略述』に引く『玉篇』の佚文について」(『大谷女子大國文』二八、一九九八・三)、同「法進『沙弥十戒并威儀經疏』にみえる『玉篇』佚文について」(『京都府立大学学術報告 人文・社会』五三、二〇〇一・一二)等。

(6) 小学館『日本国語大辞典第二版・第二卷九二頁。

(7) 岩本裕『日本仏教語辞典』平凡社等参照。

(8) 同一字に対する同一反切の重複が八例、同一字に対して又音反切を載せるものが十例ある。なお、『因明論疏明灯抄』所載の反切の詳細については別稿を準備している。

(9) うち、原本系『玉篇』など他の辞書、音義書類の反切とは異なり、『因明論疏明灯抄』所載の反切が唯一切韻系韻書とのみ一致するものは四例、唯一玄応『一切経音義』とのみ一致するものは十二例。

(10) 反切に続く『礼記』の引文は現行テキスト「：故君子之道、闇然而日章、小人之道、的然而日亡。」(『礼記』中庸)と異なる本文をみせる。これは『玉篇』当時の『礼記』本文の姿をとどめるものとも考えられる。詳しくは後考を俟つ。

(11) 大屋徳城「因明の集成家蔵俊」(一九一八初出、大屋徳城著作選集第二巻『日本仏教史の研究』二「国書刊行会、一九八七・九所収)、佐伯良謙「因明作法変遷と著述」(法隆寺、一九六九・三)、富貴原章信「日本中世唯識仏教史」(大東出版社、一九七五・二)、上島享「中世前期の国家と仏教」(『日本史研究』四〇三、一九九六・三)、近本謙介「廃滅からの再生―南都における中世の到来―」(『日本文学』四九一七、二〇〇〇・七)、横内裕人「藤原頼長の因明研究と南都仏教―院政期小乗仏教試論―」(『南都仏教』七九、

二〇〇〇・一〇)等参照。

(12) また、蔵俊撰「注進法相宗章疏」一巻には合計三四二部一五一九巻の典籍が著録されている。

(13) 三保忠夫「成唯識論本文抄所引の肝心記佚文」(『国文学攷』六三、一九七四・一)。

(14) 反切下字「亘」は大正新脩大蔵經「因明論疏明灯抄」卷二本(第六十八卷二四五頁b)では「無」に作るが、興福寺蔵写本「因明論疏明灯抄」(第六函三(三)、寛元二年頃写)および、この「因明大疏抄」によつて本来は「亘」であつたことが確認できる。

(15) 元慶四年(八八〇)成立。大正新脩大蔵經第八十四卷四一四頁参照。

(16) 大正新脩大蔵經第六十八卷二五〇頁b、三三〇頁c、三九〇頁b、三九一頁a。

(17) 「妙法蓮華經玄贊」は反切を数多く含み、『玉篇』も頻りに引用する。白藤禮幸「注釈の輸入―窺基撰『法華經玄贊』について」(『五味智英先生追悼上代文学論義』笠間書院、一九八四・三)参照。

(18) 「様者、切韻、へ女故」反。雑也。去声也(大正新脩大蔵經第六十五卷三三頁a)。

(19) 大谷大学本に注目した先行研究に、後藤昭雄「日本感靈録」の佚文断片―撰者のこと、伝流のこと―(『南都仏教』八一、二〇〇二・二)がある。

(20) 英俊は『多聞院日記』の著者。十市氏出身のため奥書にも十市のこと記されている。井上宗雄氏のご教示による。

(21) 東大寺図書館蔵写本(和書二五函一三三号七冊。第二十帖まで。正徳二年写)、叡山文庫蔵写本(天海・内典・三三三/一八/五四三・一六冊、寛永二三年写)、同文庫蔵写本(天海・内典・三三三/三/五二八・二〇冊、寛永九年写)、龍谷大学学術情報センター大宮図書館蔵写本(二七・九/一〇W/一/一五、第四十一帖に元文元年写の奥書あり)等。その他、未見の伝本に、高野山真別処蔵本等がある(『国書総目録』等参照)。

(22) 池田証寿「カシコ(彼間)」と「ココ(此間)」―因明大疏抄に見える肝

心記の佚文」(『国語学』一五五、一九八八・一二)は、『因明大疏抄』第八帖の表紙裏に善珠『肝心記』の佚文が引用されることを指摘。

(23) 後藤昭雄注19前掲論文。

(24) 吉田金彦「圖書寮本類聚名義抄出典攷(中)」(『訓点語と訓点資料』三、一九五四・一二)。また『因明大疏抄』引「類音決」については池田証寿「圖書寮本類聚名義抄と類音決」(『訓点語と訓点資料』九六、一九九五・九)も参照。

(25) 興福寺蔵写本『因明義断』奥書には「点本奥記云／興福寺沙門斎順敬の大願發書一切大小乘經律論章疏等同寺覺詮依其／勸誘以維久安四年歲次八月四日寫了／伝同寺藏俊履晴意移点已了于時永万二年春二月十五日記／：興福寺沙門釈覺憲記之」とある。奈良国立文化財研究所編『興福寺典籍文書目録』第一卷(法蔵館、一九八六・一〇)参照。

(26) 築島裕および月本雅幸注4前掲論文。

(27) 注25前掲『興福寺典籍文書目録』第一卷参照。

(28) 詳細については別稿を準備している。

(29) 段玉裁は「肥肉也」の部分で「広韻」を根拠に「鳥肥也」と改めるが、「明灯抄」の引文(おそらくは原本系『玉篇』からの転引)は「肥肉也」に作ることに注意。

(30) 『篆隸万象名義』第六帖七十二丁オに「雋、(へ似充)反」とみえる(高山寺古辞書資料第一(高山寺資料叢書第六冊、東京大学出版会、一九七七・三)。

また例えば「龍龕手鏡」卷一には「雋」の字体がみえる。なお、「明灯抄」の反切下字は判読が難しく、「充」かとも思われるが、その反切を(へ力全)反に作ることとは不審。詳しくは今後の調査に俟つ。なお、『因明論疏明灯抄』と『篆隸万象名義』のみにみえる「雋(雋)」の反切上字「似」は、従母(雋)と邪母(似)とを混同する「玉篇」反切の特徴を反映する(周祖謨「万象名義中之原本玉篇音系」「切韻の性質和它的音系基礎」「問学集」上冊、中華書局、一九六六・一参照)。

(31) 大日本仏教全書第三十三卷八五頁。

(32) 『杉本つとむ著作選集五 日本文学史の研究』第六章(八坂書房、一九九八・一〇)。また吉田金彦『辞書の歴史』(阪倉篤義編『講座国語史三 語彙史』大修館書店、一九七一・九)等参照。

(33) 上田正「切韻逸文の研究」(汲古書院、一九八四・一二)は、この部分を「切韻逸文」として轉佚している。

(34) 『因明教授抄』についてはこれまで、声点附和訓の存在に注目する指摘が小林芳規氏によってなされている(漢籍における声点附和訓の性格)一九六六初出、『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会、一九六七・三所収)。

(35) 長誓は、『僧綱補任』第五裏に「同(寛治)三年 聖者(慶助。四十九。長誓。四十五。)」とみえる人物か。西尾市立図書館岩瀬文庫蔵『法相宗相承血脉次第』にも「長誓已講」の名がみえる(築瀬一雄「法相宗相承血脉次第」『南都仏教』二六、一九七一・六参照)。永超(長和三年、嘉保二年(一〇一四、一〇九五))は、『東域伝灯目録』三卷の著者。

(36) 注25前掲『興福寺典籍文書目録』第一卷参照。もとの点本は現在大東急記念文庫所蔵。月本雅幸注4前掲論文一九九八等参照。

※資料の利用に際しては興福寺、大谷大学図書館、東大寺図書館、叡山文庫、龍谷大学学術情報センター大宮図書館に便宜をいただいた。また、興福寺所蔵資料の写真(図3、4、6)は、奈良文化財研究所の提供によるものである。各関係機関に対し、深謝申し上げる。なお本稿は、二〇〇四年度早稲田中世の会三月例会における口頭発表をもとに補筆訂正を加えたもので、二〇〇五年度早稲田大学特定課題研究助成費(課題番号：二〇〇五B-〇六一)による成果の一部である。